# ティンカーベル家の犬2

ハンターズの仕事。それは一言で言い表せない。多種多様、多岐にわたる幅の広いものだから。

パイオニア2に搭乗しているハンターズの仕事は、主に総督府からの依頼で行っているラグオルの調査。次いで総督府外からも寄せられるラグオルがらみの物となっている。

これらの依頼は、ラグオルに降下することから始まる。つまりは現地エネミーとの戦闘や各種様々なトラブルといった危険を伴う。元々は傭兵まがいの仕事をしていた者達が集まり作られたのがハンターズ。故に戦闘を主とする仕事が多くなるのは必然だと言える。

だが、それだけがハンターズの仕事ではない。

ハンターズの仕事。その基本理念は「トラブルの解決」である。その「トラブル」は、必ずしも戦うことで解決されるとは限らない。つまりハンターズの仕事も、ただ戦うだけが仕事ではないのだ。

さて、ここに一人の少女がいる。

彼女は今、一人の少年から依頼を受けてくれるよう頼まれている。内容は至(いた)ってシンプルだが、それ故に普通のハンターは請け負うのを拒むだろう。

ハンターズはどんな依頼も引き受ける、何でも屋のような側面もある。だが、それを受けるかどうかはハンターズギルドという組織が決める事ではなく、ハンター一人一人の判断に委(ゆだ)ねられている。

その基準は仕事の内容と、報酬に依(よ)るところが大きい。

少年の依頼は、内容的にも面白味に欠け、報酬も微々たる物だった。依頼主が少年だということもあり、彼にとって精一杯の額も、大人であるハンターにしてみれば小銭にしかならない

のだから。
「わかりました。どうにか探してみます」
そんな依頼であるにもかかわらず、少女は少年の依頼を請け負った。
少女とはいえ、少年よりは随分と年は離れている。彼女を大人と呼ぶには少しばかりまだ幼いかもしれないが、それでもハンターズの一員であることに代わりはない。つまり、普通なら依頼を断ってもおかしくはないはずだ。
それでも、少女は少年の依頼を受けた。
その理由を問われたならば、なんと答えるべきだろうか？
強いて言うならば、「情」だろう。
少年の切なる願い。それをひしと感じた少女が少年に同情し、依頼を受けたというのが理由。そう言うべきだろう。
プロのハンターとして、情に流され依頼を請け負うのは一流といえないだろう。そういう意味において、少女はやはり「少女」なのだと言わざるを得ない。
ただ、そのことが必ずしも悪いことだとは言い切れないのだが。

§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§

「すみません……また手伝っていただいて……」
依頼を受けた少女は、依頼主と同じよう人に頼った。
「いやぁ、君がハンターズの一員だとしても、女の子一人にこんな危険なラグオルへと向かわせるのは忍びないし」
頼られた男、アッシュは頼った少女、マァサにこう答えた。
マァサが受けた依頼は非常にシンプルな物だったが、人手が必要だった。必ずいると言うほどではないが、いればいるだけ、以来の達成率は上がる。だからこそ手伝ってくれないかとマァサはアッシュを頼ったのだ。
「ありがとうございます、アッシュさん。ろくにお礼も出せないのに……」

元々の依頼人から受け取る依頼料（ギャラ）自体が低額なこともあり、アッシュに支払う分け前（ギャラ）もかなり安い。それでも彼は、マァサの話を聞いて即答で手伝う事を了解した。

では、アッシュは何故手伝う気になったのか？

「いいのよ、マーちゃん。お礼を言う必要なんてないんだから」

その訳を、同じよう頼られ手伝う事になった先輩ハンター（アナ）が代わりに答える。

「そいつ（アッシュ）はね、単純に「お姫様を救うかっこいい騎士（ハンター）」を演じたいだけなんだから」

ケラケラと笑いながら、アナは同業者（悪友）アッシュの動機（本音）を鋭く見抜いた。

「なっ、ちげぇよ。俺はただ、友達（マァサ）が困ってるのをほっとけないだけでなぁ……」

見抜かれたからこその反論か。騎士（アッシュ）役は顔を少し赤らめながらからかうアナに向け言い放った。

「そーよねぇ。そんな自分がまた格好いいなぁんて、思ってるだけだもんねぇ」

その放たれた言葉を受け、アナはそれを倍にして返す。これが相当効いたのか、道化師（アッシュ）はもう反撃する攻撃手段（言葉）を失っていた。

もしこの依頼をアッシュが直接本来の依頼人から受けたとしたならば、確かに断っていただろう。依頼料はともかくとして、アッシュにしてみれば依頼内容が彼の考える「ハンターズらしい依頼」ではないと思えたから。今回こうしてマァサの仕事を手伝うのも、そうする事が彼の「ハンターらしい」と思える行為だからだろう。

戦場での活躍こそ、ハンターの花道。

アッシュだけに限った事ではなく、こう考えるハンターも多い。アッシュの行動理念に照らし合わせれば、本来の依頼はハンターとして花がなくとも、姫（マァサ）を守る事ならば、花がある。そういった思考を彼は持っている。

「それにね、アッシュ君。「女の子一人に」なんて事言っては失礼よ？　マァサちゃんは立派

なハンターズ。女性として接するのは当然だけど、子供扱いは良くないわね」

アナの妹であるクロエが、アッシュの発言をたしなめる。

誰かを守る事は、けして相手を見限っているわけでもも見くびっているわけでもないのだろうが、アッシュの中の美徳（理想）は、どこか「か弱き者を守る」事に対し見いだしている部分がある。そんな彼の美徳が、不本意に無意識に相手を見下してしまっていたのかもしれない。

「……ごめん、マァサ。俺そんなつもりじゃ」

「あ、いえ、そんな……気にしてませんし、事実私はまだ半人前だし……」

非を認め謝るアッシュ。そんな彼に対し、謝られたマァサの方が恐縮してしまう。

格好をつけたがるのはアッシュの欠点だが、格好良さにあこがれるまっすぐな気持ちは、彼の素直な性格に反映している。そういう点においては長所といえるのだが。

「えっと……では今回のお仕事を詳しく説明しますね」

アッシュに謝られた事が気恥ずかしくなってか、マァサはあわてて場の空気を入れ換えるかのように仕事の説明へと取りかかった。

「今回のお仕事は、「ろっきぃ」という名前の犬を探し出す事です」

迷子犬の調査。本当の何でも屋ならば確かに請け負うだろう仕事だ。だがハンターズが引き受けるべきかどうか、そこに問題がある。

「ろっきぃ君は誤って転送装置に入り込んでしまい、そのままラグオルに転送されてしまったそうなんです。なので、ラグオルに降りられるハンターにお願いしたらしいのですが、誰も依頼を引き受けてくれなかったそうで……」

たとえ犬探しでも、場所がラグオルならばハンターズの仕事だ。だが、それでも結局は犬探し。しかも危険なラグオルに降りてしまったのならば、生きている可能性の方が低い上に、探し出すのに随分と骨を折るのは明らか。そして報酬（ギャラ）は低額。あまりに条件が悪いこの依頼を受

けるハンターが誰もいないというのは、うなずける話だ。

だからといって、それを依頼主である少年に理解できるとは限らない。

何故誰も探してくれないのか？　お金が必要なのはわかっているから、こうして用意してるのに。

ギルドカウンターで涙する少年をマァサが見かけたのは、何かの縁としか言いようがないだろう。だからこそ、マァサはこの「縁」と、そして「情」をもって、依頼を引き受けたのだ。

ビジネス面も自分で管理しなければならないハンターズが、このような効率の悪い依頼を受けるべきではない。それは判っているが、それだけで割り切れないハンターズも多い。そんな「一流になりきれない若さ」を持ったハンターがマァサであり、そして……。

「さてと……どうやって探す？」

「さぁ？　そういうのはクロエに任せるわ」

「あなた達ねぇ……もうちょっと、そぶりでもいいから考えるところを見せなさいよ」

彼女の仲間達もまた、そういった若さを持ったハンターズなのだ。

§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§

マァサが依頼人から聞いた迷子犬ろっきぃの特徴はいくつかあった。

その中には「とってもかわいい犬」といった、飼い主ならではの、あるいは少年らしい主観的な特徴もあったが、探す側にとって有益な情報もあった。

「甘い物が好きなのよね……誘い出すなら、これを使わない手はないでしょう」

一つは、捕獲者にとってありがたい話だった。餌で釣るのは、動物捕獲の初歩的戦略。その餌の中でも、特に食いつき通い物が判明しているのはかなり有利だ。

だが、反対に不利となる情報もあった。

「問題は……あまり人になれていないってとこ

ろか」

「はい。男の子の話では、彼以外の人間になつく事はほとんどなかったという事です」

パイオニア2の乗員達にとって母星となる惑星コーラルは、今や死の星と化しており、人以外の野生生物が自力で生きていけるような環境下にはない。その為人以外の生命体のほとんどは人工的に飼育されている物ばかりとなっている。少年の探している犬もまた、飼い主に「飼育」されている動物の一匹だ。

ペットは普通、人なつっこい性格の物がほとんどだ。その方が飼育しやすいし、なにより人なつっこい性格になるように生まれる前からあれこれと手を加えられているのだから。

ところが、ペットの中にも人になつかない性格の物もいる。ろっきぃがそんなペットに該当する一匹だ。

失われた野生をそのままにしておきたい。それこそなつかないペットが存在する訳(理由)。自分たちで消し去った野生という名の自然を、人はペットの中に見いだそうとしているからなのだろうか？

ただ言えるのは、飼い主である少年にそんな感情も屁理屈はなかっただろうという事だけ。

「となると……餌なしではまず捕まえるのは不可能か？」

クロエに言われたから、という訳ではないのだが、アッシュは難しい顔をしながら賢明に考え、そして結論を出していた。

「という事になるわ。とりあえず餌となる甘い物を手に入れる事。そこから始めた方が良さそうね」

参謀(クロエ)の作戦に皆がうなずく。

と同時に、一つの問題が浮上した。

「で、その「甘い物」はどーする？」

アッシュが口にしたこの問題。その対象となる物はすぐに思いついた。

「甘い物と言えば、やっぱナウラのケーキしかないでょ」

アナの返答に、残った女性二人は即座にうな

ずいた。男であるアッシュには、甘い物という娯楽に疎い方だが、そんな彼でもナウラの名は知っている。それほど、ナウラはパイオニア２全体に甘味食材を提供する店として浸透しているのだ。

パイオニア２では、バランスのとれた食事をとる事は難しくない。普通に食事をとれば良いだけなのだから。ただ、その食事には娯楽要素が欠落している。「味を楽しむ」という娯楽要素が。

味という娯楽は人の欲望を刺激しやすく、故に求めやすい。そうでなくとも、パイオニア２はラグオルに降下出来ないという不満で充満している。そこに味の娯楽を提供するナウラが出現したのだから、瞬く間に人々の間でその名が広まったのは必然とすら言えるだろう。

「よし、じゃ早速買いに行こうぜ」

善は急げとばかりに、アッシュが歩き出す。

「あっ、待ってくださいアッシュさん」

それを今回の依頼受理者であるマァサが呼び止めた。

「あの……今日はナウラさん、定休日のはずです」

「あーっ！そうだった……」

リーダーの言葉に、アナもその事実を思い出し、落胆した。

「おいおい、それマジかよ？」

店が定休日という事は、ケーキが手に入らないという事。それは今回の依頼を達成する上で死活問題となる。

ナウラが休みならば、別の店で購入すれば良い。普通に考えるならそういう結論になるのだが、それがそう簡単な問題ではないのだ。

そもそも「ケーキ」という物自体が、今の文明では失われていたはずである過去の遺産。それを独自の手法と熱意でナウラを経営する三姉妹が復元させていたのだ。つまり、ナウラ以外ではケーキが手に入らないという事。

「参ったな。何か別の甘い物を探すか、次の日に買いに行くか……」

ケーキ以外にも甘い物は存在するし、明日になればナウラは営業している。ナウラが駄目ならどちらかを選択する必要があるのだが……。
「うーん……そもそも、人になつかない犬なんだから、ケーキのようなインパクトのある甘い香りを持った食べ物でないと難しいし、ラグオルに降りてしまった以上、明日なんて悠長な事も言っていられないし……」
つまり、二つの解決案は却下するしかないという事になる。
「けどよぉ、店が休みならケーキは買えねぇんだぜ？どーすんだよ」
唸りながら考え出す参謀(クロエ)。何か良い策がないかと、頭の中でぐるぐると知恵というホイップをかき回していく。
「こーなったら、直接ナウラの三姉妹に頼み込むしかないんじゃない？」
唐突に、アナが苦笑混じりに言い放った。
「それよ！」
「えっ、なに？」
姉(アナ)としては冗談(ジョーク)半分で提案した事だったのだろうが、妹(クロエ)は姉(アナ)の提案を材料にホイップ(元作戦)を練り上げていた。
「直接三姉妹の元へ行きましょう。たしか定休日には、新作開発をするから厨房にこもるって聞いたわ。つまり厨房に行けば会えるって事よ！」
少し興奮気味に話す参謀(クロエ)の作戦は、皆納得出来る。
「……ちょっと待てよクロエ。厨房ってもしかして……」
ナウラの厨房がどこにあるのか。それを思い出したアッシュが確認のためクロエに問いかけた。その問いに、少し興奮気味だったクロエはテンションを落とし、苦笑という形で答えた。

§§§§§§§§§§§§§§§§

「そもそもな」
ぜぇはぁと肩で息をし額の汗を手の甲でぬぐ

いながら、アッシュは理不尽（愚痴）を語る。
「どーして、ケーキの厨房がラグオルの洞窟エリアにあるんだよ」
　語りながら腕を振り、ぬぐった汗を振り落とす。
　ここは洞窟エリア第三階層。先ほどまでアッシュ達は、群がる化け物（アルタード・ビースト）どもを蹴散らし終えたばかりといったところ。まだここは空調が整っているだけ良いのだが、第一階層の灼熱地獄と第二階層の湿気地獄を抜けてきた彼らにしてみれば、それだけで体力をかなり消耗しながらの道のりだった。その上で化け物（アルタード・ビースト）との戦闘が加われば、不満の一つも吐き出さなければ精神的にまいってしまう。
「こ（洞窟第三階層）こが、ケーキの生地を作るのにもっとも最適な環境なんですって」
「湿度や温度だけなら、別にパイオニア2でだってどーにでも調整出来るのにね。職人の考える事って判らないわ、ホント」
　ウェインズ姉妹がアッシュの疑問（愚痴）にそれなりの答えを示す。
「ま、それでおいしいケーキができるんなら、私はどーでもいいんだけどね。普段はお店で買えるんだし」
　ナウラ開店当初は、洞窟第三階層に厨房兼売店となる屋台を持ち込み、そこだけで販売していた。その為ラグオルに降下出来るハンターズが主な客（お得意様）だったのだが、バレンタインデーのイベントを機に、パイオニア2船内での販売も許可されるようになっている。
　しかしそれでも、厨房は相変わらず洞窟第三階層。だからこうして、アッシュ達は開店当時のように遠路はるばる、洞窟第三階層（こんな所）までやってきているのだ。
「それにしてもさぁ、アッシュぅ……」
　どうにか息を整えつつあるアッシュに向かいながら、ため息を交えアナが話しかける。
「息上がりすぎ。あんただけだよ？　そーんなぜぇぜぇ言ってるの」
　今でこそ息を荒げてはいないアッシュだが、

確かに彼は先ほどまで全身を使って息をしていた。対してアナは、洞窟へと入り込んでから今まで、戦闘の疲れで多少乱れた事もあるが、アッシュのように肩を大きく上げ下げするほどにまで至った事はない。

「そりゃ、俺がお前らより戦ってるからだろ。お前らが手を抜きすぎなんじゃないか？」

アッシュの抗議（反論）に、アナはわざとらしいまでに……実際、わざとオーバーにやっているのだが……大きくため息をつきながら抗議（反論）に対する反論（抗議）を称える。

「あのねぇ……たくさん戦えば偉いってものでもないでしょ？　そもそも、君が勝手につっこんで勝手に疲れてるだけなのに。むしろ君のフォローに回されることになってる私達の方が疲れるんだけどさぁ……」

うんざりとした口調でここまでいわれれば腹も立つが、事実だと自分でも認識しているだけに言い返せる術はない。ただ顔を真っ赤にすることで気持ちを代弁する他に。

「戦い方として効率が悪いわ。だから疲れるのよ。突っ込むこともそうだけど、アッシュ君の場合もっと状況を見て体力のペース配分を考えることね。手を抜くとかじゃなくて、必要以上に全力を出すあなたの戦い方は、疲れるだけだから」

姉（アナ）に続き妹（クロエ）からも的確なアドバイス（ダメ出し）がもたらされる。あまりに的確で、もはやアッシュは落ち込む以外に取るべき行動は無かった。

判っている。判ってはいるが、実行できるとは限らない。頭と体は別であり、また感情や癖といったものもまた、頭や体とは別に働いてしまう。

アッシュの場合、感情や癖といった、本人が一番制御し難い部分に問題がある。それだけに自覚していてもどうにもならない。

もちろん、本当にどうにもならないというわけではない。自覚しているならば、改善できるよう努力すべきなのだ。ただアッシュの場合、自覚している分「性格なんだからしょうがない

じゃないか」とあきらめ半分逆ギレ半分で、努力しようという意識を持とうとしない。これもまた、頭とは別に働く、性格という名の感情なのだからやっかいだ。
「あの、でも、アッシュさんがいっぱい戦ってくれてるから、私助かってます。私直接武器で戦えませんし、テクニックもまだおぼつかないし……」
　攻められるアッシュを見かねてか、それとも落ち込むアッシュをかわいそうに思ったのか。マァサが助け船(フォロー)を出す(入れる)。
　実際、彼女はまだフォースとしては半人前で、一人でここまで(洞窟第三階層)来ることは出来ないだろう。アッシュがいるからそ、今彼女はここにいると言っても過言ではない。
「そりゃま、アッシュが突っ込んでくれるおかげで敵(エネミー)が勝手にわらわらとアッシュに群がってくれるからねぇ。マーちゃんからしてみればさ、稲妻(ギゾンデ)だって吹雪(ギバータ)だってアッシュのおかげで当て放題だもん。助かってるってもんよねぇ」
　確かにそれも事実で、複数の敵(エネミー)をまとめて始末できる稲妻(ギゾンデ)や吹雪(ギバータ)は、アッシュが敵を大量に引きつけてくれるおかげで非常に効率よく行えていた。
「出来れば、そういうのを意識して出来るようになろうね。アッシュ君」
　助け船に乗り船酔いをした今のアッシュに、立ち上がる気力など残されているのだろうか？

§§§§§§§§§§§§§§§§

「いらっしゃいませ、ケーキ屋ナウラへようこそ！」
　煌(きら)びやかに輝く、一台のキャンピングカー(屋台)。厨房を兼ねたこの販売車こそ、元祖「ケーキ屋ナウラ」そのものである。
　そのキャンピングカー(屋台)から、女性三人の明るい声が響き渡る。
　ここ、危険極まりないラグオルの地下洞窟に。
「……あー、ケーキを一つ……」

「ありがとうございまーす！」
　明るいということは、普通ならば良しとされ非難されることとはない。が、今のヘトヘトに疲れたアッシュにしてみれば、この明るさが余計に自分を疲れさせるようで、イライラする。むろん、明るい彼女たちに何の罪もないのだが。
　戸惑いも迷いもなく、こんなところで平然とケーキを作り売るケーキ職人達（ナウラ三姉妹）。彼女達の輝くその瞳を見てしまえば、接客に対し理不尽な怒りをぶつける気になれないだけでなく、「なぜこんなところ（ラグオルの地下）でケーキを作っているのか？」という疑問をぶつける気にもならない。
「とりあえず……戻ろう」
　アッシュの提案に、誰も反論を挟む者はいない。洞窟内を照らす派手な蛍光を背に、一同は地上へと戻っていった。

§§§§§§§§§§§§§§§§

　迷子犬ろっきぃの探索は、あっさりと終了した。
　情報通り、ろっきぃは甘いモノに目がなかった。地上に戻ったアッシュ達、というより彼が持っていたケーキをすぐさま嗅ぎつけ、駆け寄って来た程の甘い物好き。むしろこうあっさりと作戦がうまく行くと、何か妙に気が抜ける。
「まー、無事解決して良かったけどさ」
　依頼終了後に愚痴らなかった事があっただろうか？アッシュはまたもや、解決したばかりの依頼に対し、難癖をつけ始めた。
「今度は何が……うぐっ、不満なのよぉ……ほむっ」
　口にケーキを頬張りながら、アッシュの愚痴（いつもの事）に口を挟む。
「それだよそれ。どーして俺の分は無いんだよ」
　すでにアナの口の中へと消えていったケーキを指差しながら、アッシュは愚痴る。
「だって、ケーキは一人一個までしか買えないし。アッシュの分は囮作戦の餌になっちゃんだから仕方ないじゃない」

チュッと音を立て指についたクリームを舐め取りながら、アナはさも当然のように言い放った。

「それはそうだが、どーして俺の分が餌になって、おまえらは自分の分を確保してんだよ」

「なによぉ、マーちゃんにケーキを差し出せって言うの？ひどいアッシュ。あんな幼い娘（こ）のケーキを分捕るなんて……」

「そーじゃなくて、お前のケーキでも問題ないだろって言ってるんだよ！」

「こーんな可愛い女の子から、至福の一時（ひととき）を奪うって言うのね！アッシュってば、そんな非道い男だとは思わなかったわ……」

そもそも、アッシュがアナに口で勝てるはずもない。それに口論の元となるモノは、すでに口の中。これ以上騒ぎ立ててどうなるものでもない。ただ深いため息をつき降参の意を表すくらいしか手はないだろう。

「あらら、今日はずいぶんと早く引き下がるわね」

いつもより少し早いアッシュの引き際に、もう少しから（遊）かって（で）いられるかと思っていたアナは、少し意外で、少し不満そうに言った。

そんなアナの態度にムッとしながらも、アッシュは語った。

「いやさ、騎士（ナイト）としては、姫（マアサ）の笑顔を見られるだけで幸せだって思うべきかなってよ」

アッシュがチラリと見たそこには、ハンターズとして依頼者と接する一人の少女がいた。

愛犬との再会を喜びはしゃぐ少年と、少年と共に自分のケーキを犬に分け与え喜ぶ少女。

大人になりきれないハンターズ達の、大人になりきったハンターズには判らない至福の時。

そんな一時（ひととき）を、マァサも、そしてアッシュも味わっていた。

その味はまさに、ケーキのように甘い甘い味。（一時）